

うにの陸上養殖の提案

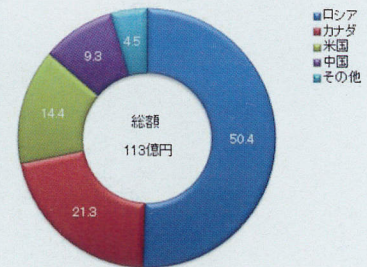
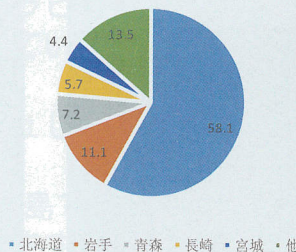
- ・ 1977年の日本の生産量は26,890トンあった
- ・ 年々減少して25年後の2002年には約半減して12,574トンまで減少。さらに減少を続けている
- ・ そのギャップは輸入が埋めてきたが、輸入国の資源保護や、資源枯渇の影響を受けて、供給も難しくなっている
- ・ 日本で海面養殖や陸上養殖の試みもあるが、未だ成功している会社はない。
- ・ 日本での生産量は東北、北海道地区が中心である。



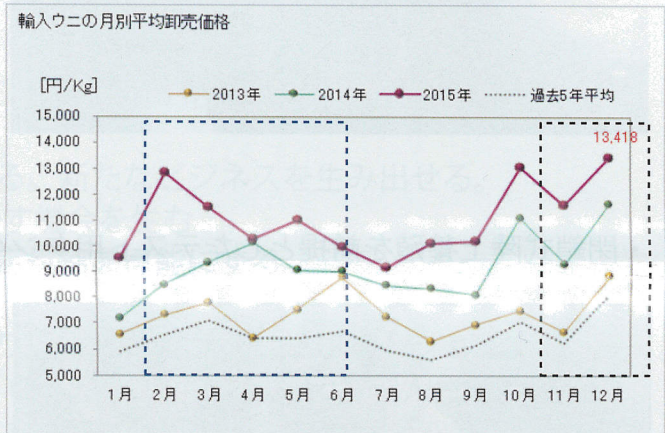
国産ウニの生産高推移【トン】



県別うにの漁獲量



- ・ 輸入うにでも日本産の出荷が少ない時期には価格が上昇
- ・ 輸入品の価格は品薄を反映して、年々上昇している
- ・ オーストラリア（豪州）のアワビの養殖は重要な輸出産品に育った。
 - ⇒ 継続的な養殖技術の進歩
 - ⇒ 養殖の最適な餌の開発
- ・ うにの輸出は過去にタスマニアから紫ウニを輸出していた時期があるが、結論的に言うと、ウニが多すぎて十分な餌がなく、色が悪いことで輸出産業として育たなかった。



【出所】東京都 中央卸売市場日報、市場統計情報(月報)

- ・ アワビの養殖技術を活用したウニの閉鎖式循環養殖技術の開発を行い、パイロットレベルで完全な技術開発を終了し、実用段階に入っている。対象ウニは白髭ウニを有望品種に選ぶ。
- ・ 産卵から出荷サイズまで7ヵ月程度で生育
- ・ 投資収益率が高い。
- ・ 温度コントロールにより、出荷時期を選べる。
- ・ 白髭ウニ（日本では沖縄から奄美諸島に生育していた）はサイズ、色も良好であるが、暖流系のウニであり（赤うにも同じ）、甘味・香が薄いのが欠点。人口餌の開発により、この欠点を補うことが可能。

輸出アワビ 2011-12

